

[20]

氏名	石倉 篤 <small>いしくら あつし</small>
博士の専攻分野の名称	博士（心理学）
学位記番号	心博第 21 号
学位授与の日付	2018 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	T グループの参加者の自己探求に関するモデルの提示 — 反省的思考理論と体験過程理論を援用して —
論文審査委員	主査 教授 中田 行重 副査 教授 楠本 和彦（南山大学） 副査 教授 阿津川 令子

論文内容の要旨

T グループは非構成的な T セッションのほかに、トレーナーが理論・モデルを説明する小講義や課題のある実習（グループワーク）など、指示的で構成的な体験のセッションも行われる。その内容やその組み合わせは、そのリーダーやオーガナイザーに任されているので、一言で T グループと言っても、その実際は各グループによって異なり、極めて多様な実践が行い得るし、また行われている。そのために一般化された T グループについての研究は余り進まないまま、実践面ではグループごとに個別の発展が進んでいる。

筆者の石倉氏はそのことによって T グループ固有の体験のエッセンスが薄れることを懸念している。そこで、「T グループとは何か」という原初の問題意識から従来の T グループの理論モデルを見直した。そこから分かってきたのは、内面での体験フェーズの移行や深い次元の体験を十分に説明し得るモデルがない、ということであった。そこで、これまで理論化されなかった体験も含めて説明し得る自己探求のモデルを提示しようとしたのが本論文である。

本論文は全 7 章から成る。第 1 章は本研究の問題意識と研究の方向性を述べたものである。まず、現在の T グループの研究・実践両面における問題点として、浅い次元から深い次元に向かう自己探求のプロセスと、内面における身体感覚レベルから言語レベルでの自己理解への体験の進展が従来のモデルでは説明しきれないことを挙げている。そして、Dewey の反省的思考理論と Gendlin の体験過程理論がそれを補う可能性があることを示唆している。また、本研究を進めるのに必要な用語の定義を行っている。

第 2 章では、T グループの既存のモデルが自己探求プロセスの説明モデルとしては限界があることを明確にした上で、それに対して反省的思考理論と体験過程理論がその限界を補って新しいモデルになり得ることを理論的に論じている。体験過程理論についてはそれを T グループに適用した従来の研究についてもレビューし、それらが T グループの効果を調査したものであって、グループの展開プロセスの調査はなされていないことを指摘して

いる。

第3章は、理論的には反省的思考理論がTグループの説明モデルになり得るという第2章の論述を確認するために、実際のTグループの事例を用いて検討している。自己探求が進んだある参加メンバーの内面が、他のメンバーへの働きかけという行動面での変化につながり、それが自身についての気付きにつながるという自己探求のプロセスが、反省的思考理論によって説明出来ることを論じている。しかし、初発の動きに当たる非言語レベルでの「暗示」そのものは反省的思考理論では説明されないことを限界として指摘している。

第4章ではその限界を補うために体験過程理論を援用し、参加者が非言語レベルでの思考から言語化されて、気付きに至るプロセスが起こるかどうかを体験過程（EXP）レベルにより評定した。その結果、Tグループでは参加者がEXPレベル4にまで上昇していた。そして、その上昇は他の参加者とのやり取りを契機に自分を見つめ、体験過程に注意を向け続ける促しになっていたと考察している。

第5章ではTグループの参加者が自己探求するプロセスを検討している。Tグループを通じてEXP値が低い段階から高い段階へと上昇した高変化群の発言をKJ法で分析した。そこから、自己探求のプロセスにおける11のフェーズを抽出し、Tグループにおける自己探求のプロセスモデルを提示している。

第6章では反省的思考理論と体験過程理論の両方を用いて自己探求のプロセスを探索している。Tグループにおいてフェルトシフトを伴う自己探求があつて、EXP値6の様式があつたと見られたある参加者の体験を検討している。セッション中に語られなかった内的体験については、グループ後にその参加者に石倉氏自身が尋ねて補い、この参加者の体験を反省的思考理論と体験過程理論を用いて考察した。更に両理論の連関性と相補性についても検討している。

第7章では、第6章における反省的思考理論と体験過程理論の連関性と相補性の考察を踏まえ、この両理論に第5章の11のフェーズからなるモデルを統合し、Tグループにおける自己探求のプロセスの最終的なモデルを提示している。

論文審査結果の要旨

これまでTグループはそれを主催する団体の中で実践家による実践知が蓄積され、Tグループを提供したり、実践家を養成したりする土壌になってきた。しかし、研究は概して少なく、あつたとしてもそれらの実践知をまとめたような論文が殆どであつた。海外では、主に米国で、Tグループの実証研究がなされているが、効果研究が中心であり、Tグループの何がどのように効果に結実しているのか、というプロセス研究ではなかつた。本研究は、日本のTグループ研究において初めて参加者の変化のプロセスを質的・量的研究を併用して明確にし、および、そこから実践において有用な説明モデルを提示した。本研究の意義と特徴をまとめると次の通りである。

(1) 本研究が、日本におけるTグループの研究史上、初めてその参加者のプロセスデータをDeweyの反省的思考理論とGendlinの体験過程理論を援用し、質的・量的研究を行つ

た点、および、それによって T グループ関係者に今後の T グループ研究の準拠枠を提供している点は特筆すべきことである。(2) T グループについてのこれまでの数量的な研究が主に効果研究だったのに対し、本研究はプロセスを調査し、それをもとに説明モデルを提示したことで、実践に直接寄与し得る点も本研究の重要な貢献である。(3) T グループのこれまでの説明モデルに含まれなかった悟りや、体験的次元の深化を説明するモデルを提示した点も本研究の意義である。(4) 従来の T グループの議論にはなかった、他領域の理論である Dewey の反省的思考理論や Gendlin の体験過程理論という新しい視点を導入した。これまでは T グループの議論は、T グループに関する研究に新たな展開の可能性をもたらすことができると考えられる。

以下に、心理学研究科が定める博士学位論文審査基準（課程博士）に従って、審査委員の見解を述べる。

1. 問題意識が明確で、課題設定が適切であること

T グループの実践の現状に鑑み、参加者のプロセスを調査する必要がある、それをもとに従来の T グループに含まれなかった体験も含み得る新たな説明モデルを提示する必要があることが明確に書かれている。その問題意識に沿って、参加者のプロセスを先ず調査した上で、それに相応しいモデルを追求するための調査を行っており、課題設定は適切である。

2. 国内外の先行研究を適切に検討、吟味していること

T グループの国内外の先行研究については十分に検討し、これまでの知見をレビューしている（第 2 章）点は評価できる。ただし、自己探求や自己吟味、自己理解などの概念、および体験過程理論や反省的思考理論に出てくる内的な体験に関する概念は、研究者によって同じ概念で違う体験を指すことがあるので、今後は更に緻密な定義が必要であろう。

3. 研究目的に照らして研究・分析の方法が適切であること

研究目的に沿って研究を行い、分析も概ね適切である。Dewey の反省的思考理論と Gendlin の体験過程理論を導入したことも理論的に妥当であり、この研究固有の意義に貢献している。

4. 論文構成が的確で、論理展開に整合性、一貫性、説得性があること

第 5 章の「自己探求の 11 のフェーズ」や第 6～7 章で提示されたモデルには、各フェーズや側面に関する説明はあるものの、これらが抽出された元のデータの記述が十分とは言えない。データの分析方法とは別次元のこととして、データとその抽象化の記述を更に説得力のあるものにしてもらいたい。しかし、論文構成、および論理展開は全体としては研究目的に沿った的確なものである。

5. 全体を通して学術的な独創性が認められること

これまで T グループ前後の効果研究が殆どだった T グループにおいて、その参加者のプロセスを日本で初めて質的・量的に分析したことや、これまでの説明モデルになかった体験領域を包含する説明モデルを提示したこと、反省的思考や体験過程というこれまでの T グループの議論になかった観点を導入し、T グループ研究が新たな地平に拓かれていく一歩をもたらしたことは本研究の学術的な独創性である。

6. 国内外の学会や社会に対して貢献が認められること

本研究が T グループ関係者に今後の T グループ研究のための基礎的な枠組みを提供している点は国内外の T グループの学会に対する大きな貢献である。また、本研究が参加者の内的体験から行動的側面に至るプロセスを調査したことや、その調査をもとに提示された本研究での説明モデルは、T グループ実践者に対する貢献である。

以上のように、データ記述の一部にやや粗さもみられるが、それは本論文の学術的価値を低めるものではない。T グループを研究する上での新たな参照枠を提供し、**実践する上で従来のモデルよりも体験の深さと広さを備えたモデルを提供したことは、博士論文審査基準を満たしている**と判断できる。よって、本論文を博士論文として価値あるものと認める。